

裸族を取材するロケ！撮影許可を得るために新人AD女子も裸になって撮影！

某テレビ局の海外ロケ。今回のテーマはまだ知られざる民族特集。日本から遠く離れた国では、裸族の人々が暮らしているという。取材班の4人はボロい小型ボートで近くの大きな空港からその裸族が住まう島へ向かった。島に着くなり、大勢の裸族がいて取材班を待ち構えていた。全員、何も身につけていないすっぽんぽん、老若男女がだ。

プロデューサーの佐藤は42歳で、業界22年目のベテラン。島に着くなりサングラス越しに族長らしき男と接触し、ペコペコ頭を下げながら、取材の許可を取ろうとする。

カメラマンの高橋は38歳。無精髭で日焼けした体。カメラと三脚を担いでいるだけで汗が滝みたいに流れてくる。機材が濡れないようビニールでくるんでいるが、もう腕が限界だ。

新卒ADの矢内美咲、22歳。入社9ヶ月目。海外ロケは初体験。入社前に想像していたテレビ業界はキラキラしたものだったのに、現実はこんなにハードな肉体労働。先輩

も怖いし、正直入る業界間違えたかも、、、と思うが、一生懸命働いていたのが評価されて、今回の出張に大抜擢された。

もう一人のADで通訳担当の寺内亮太、25歳。入社3年目。英語と現地語が話せるから急遽連れてこられた。普段はデスクで資料作りしてるだけのデスクワーカー。今回の内容を聞いた瞬間、海外に行けるのラッキー、外国語大学出た経験がここで生きるとは・・・と喜びを感じていた。

族長に案内され広場に着いた。族長は50歳くらいの男、全裸で首に貝殻と牙のネックレスだけ。威厳は

あるけど、剥き出しの股間がだらんと垂れてるのが妙に目立つ。周りには全裸の村人60人くらい。子どもは普通に走り回り、女性たちも胸を隠さず平気な顔、若い男たちは明らかに興味津々で取材班をジロジロ見てくる。老人たちは座ってボーッとしてる。

亮太が族長の言葉を訳した。

「我々の土地に入ったからには、我々と同じ姿になってくれないと取材は受けられない」

佐藤は一瞬顔をしかめた。高橋は「はあ……」とため息。美咲は顔を真っ赤にして地面を見つめ、両手でスカートを握りしめる。亮太は

「つまり、裸になれと……」と告げた。

佐藤がため息混じりに言った。「……しょうがない。これが条件なら従うしかない。局に文句言われるのは俺だ。俺から脱ぐ」